

## 演劇は「暗記」を超える

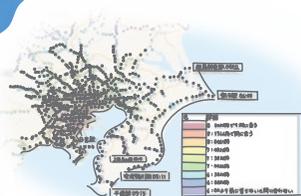
演劇サークル「EnTropy」は、年に2回、夏公演と冬公演を上演している。複数の脚本をもみなおすところから準備が始まり、舞台美術や照明、音響設備も順に整えられる。稽古のたびに出てくる脚本修正や演出案は、深夜にZOOMをつなぎ、より厚く、より濃いものへと昇華されていく。舞台をつくるということは、演劇と生活の境界をあいまいにすることに他ならない。

その中でも苦勞するのは「暗記」である。演者がセリフを覚えることはもちろん、音響や照明もタイミングを合わせることが必須である。舞台上で台本を読むことはできず、緊張にさらされる。「覚えていく」過程は長く過酷ではあるものの、演劇において外せない行為なのだ。

だが、うまくいく公演は往々にして「暗記」を超えている。演者は役に没頭することで隙なく言葉があふれ出し、そこに音と光が重なるとき、脚本の良さが色鮮やかに映し出される。「阿吽の呼吸」が生まれた場では、演劇はすでに完成しているのである。

平野 央君（総合政策学部2年）

劇団  
EnTropy



## 地理学につながる 地理を慶應で

### 地理倶楽部



地理というと中学高校で習った内容を思い浮かべるかもしれませんが、それとはまた異なります。地理が苦手だという方も旅行や出先で地図アプリをご覧になるでしょう。いくつかのお店を回るときに経路を考えるでしょう。そうした街歩きや地図への興味を出発点として交流を深めつつ、主に歩くことを通じて地理の理解を深めることが当部の活動です。だから「地理学」「研究会」ではありません。「地理倶楽部」です。具体的には月に2回程度「巡検（街歩き）」を実施しています。また「一限マツプ」という、三田キャンパスの一限に何駅を何時に出発すれば間に合うか調べた地図なども制作しました。

福澤諭吉先生の『学問のすゝめ』（岩波書店）の初編にて、「なおまた進んで学ぶべき箇条」の一つ目に地理学が挙げられ「地理学とは日本国中は勿論世界万国の風土道案内なり」とあります。地理倶楽部は設立3年目ではありますが、この気風を実践する場として邁進してまいります。

館 恒大明君（経済学部4年）